

岡静府駿 と私

【第18回】



パクス・トクガワーナ

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝つねたか



將軍綱吉の御前で謁見する図(ケンペル『日本誌』より)

私は一九七一年から七五年まで、日本郵船のニューヨーク支店に勤務しました。ある日、ジャパン・ソサエティの会合で、かなりのご年配の米国人紳士にお目に掛かりました。彼は私の胸につけた「トクガワ」という名札を見て大変に驚かれ、次のようなことを言われました。

「私は世界の歴史の中で、徳川家康公はもともと素晴らしい指導者だったと確信し、尊敬している。世界の何処の国でも、家康公のような指導者が出て、三世紀に近い平和を維持して、その国の基本の文化を創ったならば、『国父』と呼んで町々に銅像を立てる。日本がそうしないのは、まったく不可解である。若い貴方は、その家康公の子孫として、狸親父などという家康公に対する誤った評価を正すように努力して欲しい」。

このことは何時までも心に残り

ました。最近では我が国でも、大変革のあった戦国時代を境にして、古代から中世までを一つのブロック、江戸時代(近世)と明治以降の日本(近代)をもう一つのブロックとして区分する歴史の見方が出てきています。つまり江戸時代は、近代日本に引き継がれてゆく基礎を築いた時代として、近代日本とひとつのくくりにして考える方が正しいという見方です。

江戸時代は、日本に事実上初めて登場した強力な全国政権のもとで二百六十五年にわたる平和を維持し、現代に繋がる組織のあり方や理念、洗練した経済社会を発展させた大変にユニークな時代でした。西欧の歴史学者は、「トクガワ・ジャパン」、「パクス・トクガワーナ」(徳川の平和)と呼んでいます。

戦国末期に來日して三〇年間、日本に滞在した宣教師ロドリゲスは著書『日本教会史』の中で「土地は耕作されることもなく荒らされ、敵方や隣人に強奪され、互いに殺しあった。日本は極度の貧窮と悲惨に陥った。商取引についても法も統治もなく…」と描いています。

その約百年後、元禄時代に來日し有名な『日本誌』を著したケンペルは「この国の民は、習俗、道徳、技芸、立ち居振る舞いの点で世界のどの国にも立ち勝り、国内交易は繁盛し、肥沃な田畑に恵まれ、頑健強壮な肉体と豪胆な気性を持ち、生活必需品は有り余る程に豊富であり、国内には不断の平和が続き、かくて世界でも稀に見る程の幸福な国民である」と書いています。

根本的で劇的な変化が、この二つの時代のあいだに起こったことがよくわかります。